駿河舊記

^13
4440
2

A13
4440
2

駿河舞卷之三

四齣　羽衣の松樹

既る其夜も稍更るまふ頃外面なる萩紫苑女郎花尾花葛花のさゝひ人の丈よりも高く生延る中に押分押分やうと知て大漢八強盜の元謀雷雲太郎うり今宵深更に及んで伺寄る女兒七女を奪んと千草百草茂きる頼よ身に潜て内の光景に伺ひ又一箇の悪心前〳〵うり。漁夫伺寄る秘まる覗蒙羽衣の一巻に取得るうゝぞ。己初年よう赤松の都よりうざるあ人室町家は西時に成ゝを以ゝ僥倖うを。伶人福原貞澄と名乗て。武將義政よ迎う。年来の念願に成ぜん捷徑うとて。

独心喜さ笑ひ給へ。時分はうと懐中より。號笛を取つゞ。
吹給へ合図なるゝと。此首彼首より数十人駆き出る無頼凶人
七手八脚よ浮きの引提て互に隠密通じ合。行ふ所を
まるべき軒もうてもく廉へ吐と跳て乱き入こハ何度と手を
尤京之助ハ伯寮親子を囲て立ふさぐ。腰刀を抜
けて。まつ〳〵ハ切人と身構へ。霜雲太命ハ郭下ま下知ま。
乙女と秘書を奪ひ取る二個を討捨よと。つゞう早く被ぬき
て切てゝ〳〵ハ。とく〳〵せぬと尤京之助も被合せ。三三合戦へうち
霜雲太命とゞめ数多社郭下。吐き出免せと迫ゆ〳〵ハ裾を
の桜吹ちゝす。冨士風ま吹ゝ。血氣の尤京ハ退さゞ

と。逸足出して退行跡。軒端の松の木蔭より。仕向ゝ霜雲
太命。乙女を抱き人秘書を。取立ゆらんとする所と。やと支る
伯寮を。面倒ゝうと蹴飛せど老眸ゝ身をかゝ。太命が
持る秘書ま手ゝ抜け。家ま傳ゝる薙曲の一巻。除人ま渡
さゞとゝ仕せ。強氣の霜雲太命。力抜手も見せぬ。隅
四五すきりさぐ。ハ。啊吶と叫て倒きふ。ふゝ〳〵やと
かゝるゝ乙女を引立ゆうんと氣をつゝ。深手ま伯
寮を。秘書ま一心とぐまりて。離しゆせぬと抜る。尤京之助
して取らんとする。潜る処へ尤京之助伯寮。親子を組きく
中途ゝ取てゝ人を。此躰を見て。霜雲を。南無三宝と

逃げ拍子よ。惜むべし。霓裳羽衣の一巻いまよう斬絃と
裂き。未き此場よ離まぢと。初ちの方を奪ひ取おのゞ綽名
の霜雲ハ行去も知らず逃失うり。尤京之助ハ跡へ手
疵よりる伯寥を。人まよう周章うけおのて。女諸共いと
まし。苦し紀息ぜ知つと法ぎ。尤京ぞの仁兄抜出
ぬき裏通より。立うへ。ハ強盗の元謀察まる所先ぱり。
此辺よ。俳徊する。霜雲太郎と呼ふ者うん。彼尋常の
盗賊うハ金狼衣服のゝ心ぢゝまよ思ひもよらぬ華曲
の一巻を奪ひ。ハ不審ゝと。聞う尤京ハ仰天。秘曲の
一巻奪ひまそハ打捨ぬまきぬ一大事ゝ。又恥ぢんとうよ伯

と伯寥ぞめて。先待ぞよ。必ゝと剽軽のうまよ。歓ハ多
勢の悪雲原仁兄を一個血氣のまやう雄。ぞ。ひ焚冷傾羽が
勇ぢうと。土地の案内知りの。甚上身命代摩廿ぢう
も知ゝとする。頼必人よ向ひんハ石を抱きく深淵よ陥
ゝき品行うぞ。ぢを運の尽ざるや。秘曲の巻ハ
手よ残ぞ。ゝハ安堵下さよ。是はきて伯寥が抱入
紀仔細ぢと。残まる一巻を。ハ奪ひ扇子の上よ。ぜ。過打もハ
ぞく。先祖福系負屋ぢう。代ゝ秘曲の通を傳へ。猶多ゝ
身ぞ。ぞと。尚命ぢて都ぢ立去。四十年来夏ゝ。三絃の
浦ぞの松よ。昔代結ぢて必代ハ。厨る芸ぢよ。是ぢる。ま通女

羽衣乃松樹
霧雲太郎
伯容

乙女

乙女を役者。富士の高峰清見潟の月雪を猶ゝ思ひて。養育ふせ。母を死去一個の父を力として世を仮うき彼ら身の上其親さんを彩のやく。深辛まよる秋の色を葉をけるを流ともを浴く清行今際の遺言。拓ことつゝ仁兄の扇面を。男感陰氣秋思女と手ふ。諸の心はいとゞも乙女ゝ男をとつまの色。月はいつかせ秋月かゞめる。老眼ゝ霜とゝ。漁夫が女兒の妻乙女を厭ひ心ゝ心ゝ此扇面と兼曲の秘書。取かく両人が肌身を添ふ婦女の情ゝ秋の移ゝ。牧させ物ゝ。身の苦痛ハ打ゝ子ゆる遠ふ親恋九京論も道理を仕し。富を成ゝ。息女まで。

かゝハ師氣やいさん。泰山ゝやせん。何ゝ事を師遺言。はゞゝ引仕り直ゝ霜雲太帛がゝり家尋求めて秘書を奪ひ。俄を討て見今の師情ゝ秋散ぜんと世ゝ頼母布聞へゝ。伯察ハ嬉ゝ。其一言ゝ死出之途の冥路も思ゝ秋の夜の月さん名殘と情女兒の身ゝ。其ゝ息ハ後果ゝ。九京之助ハ乙女ゝ。漂言ゝ早く巳骸葬すて敵の手ゝ秘書の絵巻。女時ゝ行孫ゝ。野辺のいとゝ浜のまさ。嘱金福物まで。清見寺の霊簿。福系主水正貞澄。俗名伝記ハ。此伯察ゝ変ゝ。漁夫ゝ住ゝ軒端の家を士人羽衣の松

樹こゝびて今は枝葉繁茂せり

五齣　桑名の渡に

乱ハ治の基とて。蕉仁以来都鄙静謐うて。市井まる人
遠遊弦好人往き還さの商賈も。進退自由ゆ。五畿七道
乃駅亭賑しく。草木も靡く夕風よ。鳥も栖を求ぎ。遠近
人も道をぐ形る。黄昏の汐ひ撞の音も。と物憂さう
ひたり。鶺雉の尾張乃国。桑名の渡に聞へ。東海道の
駅路うまごゝ。人跡絶し深夜の雨よ。嵐もそゝく。憂さゆハ。
旅の常ゝ不敵の浪人。渡月もうれ闇路ハ。岩に来ゝも
一条の大縄おうたゝり。渡にの芦間ゆつるぎゝゆふ。答ゆて

霞ハ小船ようョ行と。ふ声を小夜風よ吹送ぎバ。伴の浪人ゝち
ゝぐまり。我を呼やとゆうゝ。人ぎバ人影ゝ。もけゝず。備ハ芦の
葉をゝく嵐ゆハ。人声と聞あやまりよう。ふき夏よ隙ゞし
と。人ゝ行るゝバ。又ゝや跡よ人声けり。是ゝ深
夜のゝ。狐狸の類ひの所為ふゝんと。聞捨又も行ん
とゝ。北川宗左衛門ア待と。偽名ゆゝ。呼ゝ合
点行ゝと思へども。両刀の用行ゆあゝ。鯉口ゝゝ慢
くゝと立戻て我を呼ゝ。何出ゝを見ゝ。ゝの小
船のうゝ。ゝ揺ゝ。ゝ。其人物ゆ火影ゝ。ゝバ眼
大ゝて光ゝ。ゝ。負の村高く肥ゝ。斬髪ゝ

獅子の頭よりくく頻髭ハそゝけまようへすて猛獣逃まゝ
叫ぶさるがごとく形る大漢子四辺狂見めて。陸ようけるる下秋
の音ハ大地をゆるがしけりや北川宗左衛門と偽名せし。城山名
左衛門入道宗全が冨長。桂左衛門信明うゝずや。ゆ子ゑを丸
忌ゝ。先年嘉吉のさゞめ。室町の将軍義教を殺し。文
安二年。足利義政が為よ。中国白幡の城を攻落さま。自殺
と偽り存命ゆゑ。赤松入道満祐ぶりと聞より北川ぶゝく
備ハ満祐ぶゝゆゑゝふ。先年白幡の城没落の仇。討
死あゝ入道が再生なせる仔細つまず結ゝまよと。傍への
小石ハ腰打ケ。聆もせず守り居る。赤松満祐声を初め。

武門の奥癖ハ戦国の常なるゝ。家先祖赤松治部判官
則村法号圓心ハ村上源氏の嫡流すて。足利氏ハ家ぬ
家系。然るゝ尊氏の末葉をゝ。今室町将軍と号。敬する
に惜き。六代の武林義教を討ゝ。其座ゝ全て四海を掌
掌せんと計る所ゝ。義政が下知ゝて管領細川勝元直ま
自情の城へ攻入。宋方の一族若縄佗間をゝ。九月佐用
小寺ゝ。ゝも討死ゝ及びゝ。我ハ情ゝ命ハ惜ゝ。孔
軍の中を落のびて。再び逆気を企ん者一族上月一学ゝ
者。百鯨始好年齢まで。此入道ゝ仕ゝる。狂僥倖思ひ出
ゝる漢土の例。大聖人孔子ハ陽虎ゝ。ゝる者ゝ。仕ゝ

北川宗左門

桑名の渡口
赤松入道

つゝ也人死去て匡人は生擒るものゝ是で軍法は至極の術と仕つきたり合て白幡の城中はおのゝ自殺せゝへ則上月一学あり。孟八夫より世を忍ひ二十年来斉計と共ゞ仁の一丸を滿祐ゞ方すより出こり其故ゝ人とゝ武林義政管領細川勝元ゞ白幡の城を攻落せゝ功を賞ゝ室町家の重宝富士丸の印劔紀を乞す。是で執權細川山名両家宿敵は及ん基ゝ北川打うゞきゝ中を入道の剱のゝ柿此法師と云ふ上古仁皇六十六代一条院の御宇源家の棟梁多田満仲公の命ゝ従ゝ二振の名剱を賜ふ其は唐土大原府ゞ唐業明と云ふ帳治。

唐使裴璆ゞ法のて来朝あり。筑紫の國三笠の郡士山ゞ一子を設ゞ名を宝珠文殊の唐俤とよび此帳治拾遺國多田の庄平野の滝乃ゝを云ふ陰陽二振の太刀狐帳ふ心魂天道ゞ通ずゝ焼刃渡ゝの湯烟雲霞と立昇るゝ唐俤ゞ倣白髮の老翁と変ずゝ口の如く辛丑にして蛭もゝ以ゝ備もさゝ也ゝ級也人雌の太刀ゞは青龍の勇ゝ雄の太刀ゞは白虎の勢ひゝ唐俤ゞ面頰白髮と成ゝ也人雌の太刀を深雪丸雄の太刀を富士丸と號ふ源氏累代の家ゞ尊氏ゞ傳りて足利家ゞ永く秘蔵ゝ細川勝元ゞ軍功ふ多ゞ富士丸の御級を授ゝ山名宗全妬ゝ思ひ

うべ。義政此怒氣を察し。山名細川ハ両の翌日。ひそかに手筋を及
び。四海の大変をおそれ。山名宗全ハ深雪丸の御級を乞
う。桂両家水魚の因を結せん為。山名の息女天津妃と久
しを細川勝元ハ家臣近之助ハ家と妻則富士丸深雪丸
を双方へとりかくし。秘蔵せんと有て。山名細川両家も傾心
をつくしぞ。頃をつぎ。近之助ハ五葉天津妃ハ三葉の時
ふまべ成長の期を待ところ。何者の所為ぞや。山
名の宝蔵へあらび入義政公より拾ひ。深雪丸の御級紛失
せり。緒方の入道宗全ハ直ち宝蔵の番人御岩の隼太を手
討ち。宗全の心裏ハ正しく此盗賊余人ならず。細川勝元

深雪丸を奪ひ。富士丸と共ニ秘蔵ふかんと。疑念を
生ぜしとつぶやき葉つくく思ひ廻らし。細川家の動静を伺
ふ。管領職の身ながら。何ぞや夜盗の行状あるべきぞ。この盗
賊ハ四海を掌む。叛逆人の所為ならん。定ぬ。推量
ま遠ハず。同夜ハ細川勝元ハ宝蔵へも盗賊忍び入り。富士
丸の級を奪ひ。宝蔵の門人神楽良三八と云る者。院ハ生害
ハ及ぶ。ましさ。勝元ハ怒免して。宝級の在所を詮索せよと
有く。直ち神楽良三八ハ出園のうち。家ハ同ちの三八ハ。元
級ハ其時ハ深雪丸の御級も。細川の手ハ渡り。山名家の
振捷とうんも外りぬ。九ッ。皆時も程遠ずとぞ。

ものも採りあへず都を発足して、西へ西へと落ぞ行まし。
詮義の緒も見へ聞ざる其うらよ山名細川の両氏権を争論
ひつて應仁の一乱とぞ行。院よ山名方敗軍よ及びて主
君入道宗全殿細川勝元ぐ帝を討奉るの逆臣なりと奏聞す
ゆ徴しとぞ仰て今八宗教の法を当の歌舞伎猶元
政亡し主君ぐ修羅の責犯を散せん爲花亀門と云ふ実
若狭深くひくに北川宗九郎門と帳名して軍勢催促せんと
初冬の風雨をいとはず此海道をよぎり所原来関長
の夏の老人面さへも見へ寄れよ北川宗九郎門を呼ける。
勅静とひ應仁の乱仁兄の方すら出さるとへ其因縁こそ

ゆ多くと仕侍迚くすくに去ぬ。成程不審ハ如何
実名。赤松入道満祐と云へる者をはくみ。帳名を北堂尔と呼て
軍勢を集ると云へども方率ハ得ず。一将ハ始て味方なき
て勅軍の大元帥とぞのまん英雄桂九郎門信明ぐ外ぐ
ひくぐと思へ多人伝堂の者ぐ者ぐ食ぐ下の行去を尋る者ぐ今
宵此海道ぐ来まる中を告るよりく疾ぐ来ぐ侍べう。
今日ぐ今より我ぐ力を添て室町の武将義政をとどめて。
管領細川勝元を攻亡しふ。山名宗全ぐ情りを散ど
赤松ぐ宿意を達して勇名ぐ四海ぐ表せん此旨通ぐ
なるべぐ下ぐ品ぐと芦間を別てとりあへる。

まうり給うるさ深雪丸の御級ろう満祐めさしてい給う両家
年論よ及ぶ一基とろうし二振の級山名細川の宝蔵へ志のび
入く奪ひしい物ろ入道ろ所落ろと語るを聞て北川ら面は
怒気をけうらせど痩まず不敵の赤松満祐両虎爭ひを
一虎費よのふとろふ軍法の奥儀應仁の乱よ為元打勝ち
威を海内よ震ふとろへ是ぞ桃乙為見下をまゆき程又
耽ろ必べ拔初光の頃擴行せ一子四郎祐國とろふの出羽
の国羽黒山よ在て数多の山賊をかてろひ此頃ろ強及宗為
山ろる蘿の庵よ隠を住ろ一尤ろまぞ彼ら部下も赤流
黨よ集め不日ふ繁いりあちまろらだ四海を振掌の時系

をろ物密夏を明せ上ろ上ろるもぐめの恨を打捨て此赤松よ
一味して細川を亡し入道宗全ろ哭を慰むるまゆて武士乃
本情ふまを理此此角よ速ろまべ北川宗尤為ろ方の見ひ
をろ一良有て矣級を紀満祐ど伊理よ為まろ。
深雪丸の級ろ更取るべ外よ云恨もいろぶべうよを仁見ば
味方よ加ろ細川勝元を攻已し山名の家を再奥せ見を
ふもろる夏ろじと同心の時よ見へまを赤松ハ満是ろ。
夜も遅明よ近ぶ者べ赤巣宗夏を伐ず
敵ろ一ひ川ろ四辺よ生成る芦ろ向ひてキノニノヤノハノ
モノと呼まハ見彼ろ伝當の大勢皆一やろの黒煙東平

毎日雪掻灯を園字ゐる
九のの式合後已そ日番
キノニノヤハノモノとぞ
答る境節又も濃
ある面ゲ下ぞ吉くゆ
掌振せんず皆あそ首長紀楚ゆ
巣ゐ人徒堂引つ立場。火新次郎ゆ
抱凄き松の風浪青ゐく少ゆる時。
芦るようぴつと知ゐる九合の身ゐ
さんども見ゆ錦繡式義ぞ。

うりとゐぶき男提頭挨を提掉頭せる蓑ゐ雨うちゐのぎ。
ゐらゐるやうギノニノヤノハノモノと信話なゆて合刻ゐすの宮を
除けぞキニヤハモハニ不審ゐと思ゐ案の折柄向隣跳出す後者
ぶ青皮の雲後の挟箱基金。立傘。挨下。風ゐ廉を源源。
御在の素物舞辰く。親随姫め扈者。廻下ゐす金八伴
の九児慢く地ゐ清ゐ素物の戸を引立て用宴八帰ぐ素物
やきの御声ゐ前班後後の行処ゐて。都路ゐ七ゐ行。

六歌　深草の秋風

奥ゐ管領細川勝元の家臣神楽良二八とつひて。忠心無二の
武士ゐ上げ。先年細川家の宝蔵へ夜盗忍び入て宝剣の武器

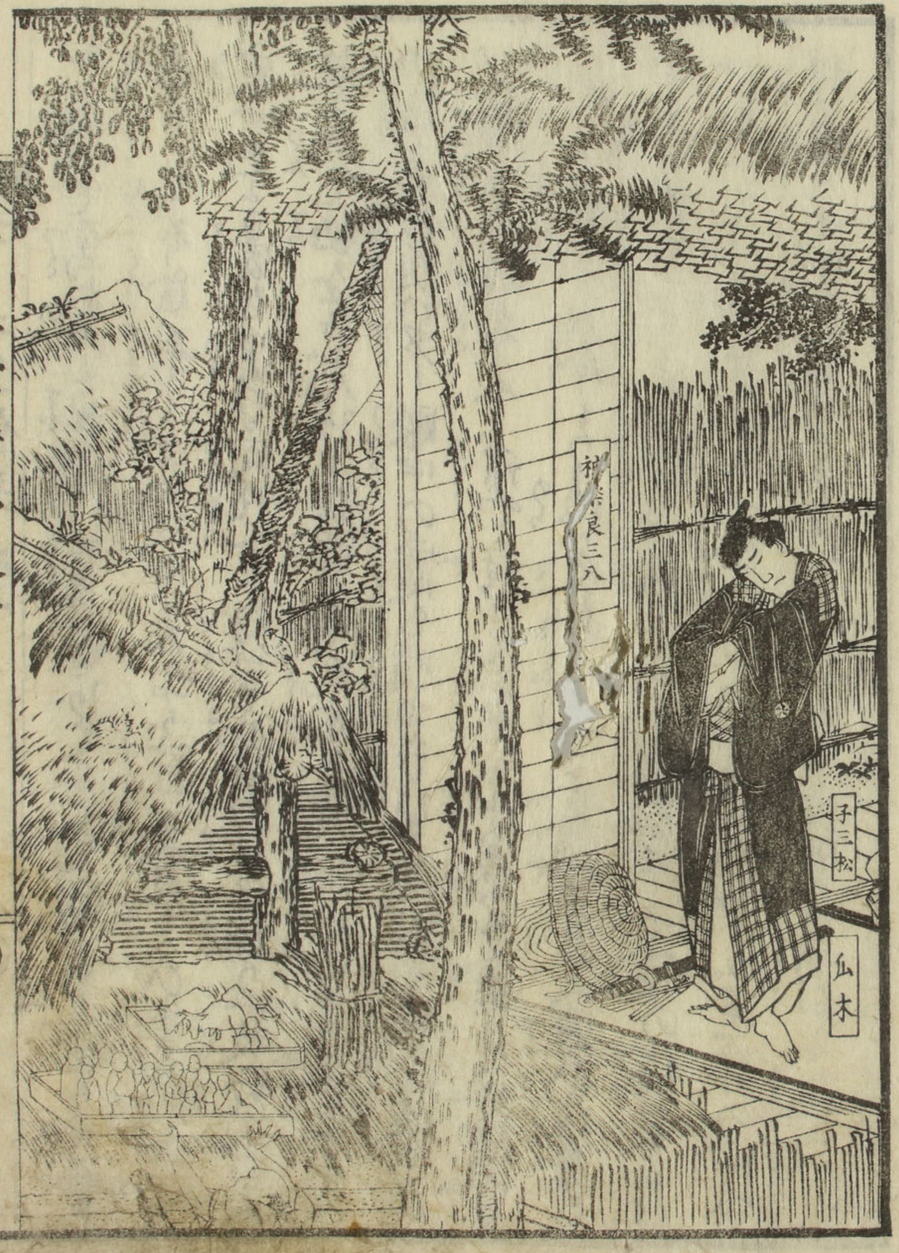
義政ようの後ひ留主元の名跡を奪ひて行去郷ざる由(を)聞の
宿直神樂良之八が冒度と流申理為きやうひ[illegible]
阮ら生害ら及ひんとるせしうどに仁心浄光院殿ハ[illegible]
年来忠義をとひ死をそめて紛失せ宝級さ[illegible]
再び帰系を設すべしその作をあり君命の有類さ心魂ろ
徹して弥忠義の道を忘まず夫ろう妻女瓜木と十四年ようを
玄光院殿嘉子の三称を[illegible]寒くと任別し爰ハの藩中
を忍ひやる立退所も速く宝級の盗賊を捜索せんとハ[illegible]
何ぞを面と心ざすかもあく其上見弱の妻女を具して遠国波
濤もとひ旅ろん良もありぐうとて瓜木が故に源州の迎ちく。

膝ひざ[illegible]ひり[illegible]角屋を借りて妻女と兄弟の二子を爰ときめ賠
償さ[illegible]の黄金を分ちく長途の旅程ろ[illegible]なるをのて三に
を養育せようとて瓜木小源さとひんとも行先とても定めあき旅
路ろ新きやつ[illegible]ひ[illegible]ひつくけきとと心ふく
待[illegible]去ふろ。彼の貯よて親子三人色彩人良ろ来ろう
とて賞ろ瓜木頭を打ろ跡の良ろ[illegible]家をひろ[illegible]
世ろうのふひて烟の代とあきのハ瓦をやき人形を造ら。
武ハ図を制して其月を送ばハ多く親子も月ふ[illegible]ずてろの[illegible]
法を見ふひちばよりや飢ろ除む良と有まず良夫とと他の玉
ろ行く宝級の在家を尋求る良ハ流の聰佐殿ろも探ぬん

事かくなきども弓矢神の覆庇あらバこそ恭喜帰坐して今
の憂目を昔語りとなす時ハと流石ハ武門の妻女とて健気なる
も又利発なりけるが神楽良三八が旅の調度何くれと取揃へ記
程せんとするにぞ此本の予より此度の旅行ハ大切なる事なれバ吉
日を撰みて出立させんとて近隣の農家より大雑書を借り
書籍を借て旅立の日の善悪をうらなひ暦を繰り日数かぞへ
凶く明日ハ悪し明後日よしなどゝて一日二日と過しけるが
所も変ハ難なく涼しの里ハ秋の風身にしむ頃なれバ
時候のなりひなりとて或日朝まだきより一陣の悪風ふきて吹て俄に
三八が眼中へ何やらん入りと思へバ忽ち痛くなりて両手をあてゝ瞳

をおさへ苦しむ光景なれバ此本ハ大きに驚き立騒ぎ
いろいろと手を尽くし痛みを治さんとすれども隣家より来り己が法に眼
病の妙薬の洗薬なりとて人参の目薬など持来りて与へしも更に其
験ハ見えざりし三八も今ハ是非なく起居もならず眼病の保養に
日数を送るうち内障の病症となりて東西緩目もあらぬ難儀を成
弟子妻子も今はせんかたなく神仏に祈り種々の薬を施し
の薬ハ遠近の差別を論ぜず是を求めて服薬させしかど
なりけるぞ其年も夢と暮れ新玉の春を迎へしかど
門松立ず餅搗ずて元政法師が
ままで丈ハ世捨人の庵の如く是ハ世に捨られる親子ならで

深草玄秋風
三八郎


初代良三八
子三松
仏木

を悔て爲免とる。行貴の心ありてよて賜ふ。黄金も四角なる
囊中にて布囊果しがたし。三八心は思ふやう。此苗を白地のひまぎれに埋
家女見は夏を重ぬる同孔にて容は庭の小石を拾ひ一枚二ひらの衣
故は色て秘をき尤ひ思辨ありて凡木は向ひ神仏の霊底医者の
功能は此頃の者眼中の霞も晴ぬきたるまぎれふ人全快は及
び嶮立の期なるべし。深く疑て食へば山も前を坐して飲ば海も
乾くの理あるべし。今ようの病は医師のりこん通ひ治身と
おもひ肉を守りて始ひ如く固ありと割ふて粮の代とるべ
かまへて行要ふきとて凡木は其日初右ふ。医師の許へ
程遠して中たどりくて行ふるるに。今次附着病ふ。速は全復

有ん心開しをあやまらるこを知ふとど。縮て保粮ひきとりへばやとよ一
條の竹杖りて道の役とせば又歩行もひとりへ保粮ふきとて更は孔
引ふ孔ふ。翌立の日より杖は拾ひて医師の方へ行んとするを止む
ふりてふりと有て道の役は光束ふきへば況ふ家は貧困凡木の
行日ひきへばふの注日をひりて四五箇日も過る時。三八をつものこ
羅登して面を隠し。杖を力は杖だ女見は家も見へ隠きは孔
ふまてふ。三八を角とを知ず徐草の草楽は踏きうむ多は伏
見の方へそうり行建けぎこる人家の軒は拾ひ雨の声多長
ぶ。ひるこ。ひふ流きるこをさえきて思ひの怪煩きつ
くきを楽きるこ。三界は流転して孔人間のとい祝のてきるき雲

乃端の月のこゝげやうきゝらがれど如平等の落子到らんとだにも
歎うずして娑婆のきつきに詰とめてむ身の上なをうまぜて深く
うら悠の采銭を帰て遠里那里に傍徨るを見るよりお霜いとゞ
らへてき心地してぞうふ所節なりしとそ菅須細川の家士神楽良三八
とも有ふ身が人の軒端に傍徨て破扇子ふ白茶ぞ受け親の不仕付
事でや先皆親子が身に幸あく去年の秋より父上の眼疾とふ
らせ給ひし旅行浴様しき光景を悔き洞乃其中に寂心に思ふ
やう貌醜きハ念ぞ川竹と身を沈めうぞにやへ多くの黄金に
換るを此まで父母の為に身を捨て孝なるが道でりしと思ひ
密かに家へ帰りて其夜父三八が睡眠せし折を伺ひ密に母を

瓣泽処へ招き父が行状を語まれど所本が老き大方なる手父が
身を烟花へ賣渡して貧苦なかりせバ母ハおのれまでも一ゝと語るなど
を洞かり母ハ漸涙目を拭ひまゝ年端も行ぬ身が親のためとハ云ど
子なりこそ所詮浮身の流に沈めつきと貧苦を扶んと流石に
神楽良三八とそ人に知れた武士の女児なれど何る健氣なる
志ある汝ハ洞を知て母上にハ恩の事を言ふぞや山家の桜ハ
花ハ手入が充れ路辺に咲のへは雨露にそぼて草の原に枯果んそ
是ハ思ハ捨なん親と子が世を久しく春も有ぬべしとなど二千の
へやへ宇式帝の桜もいなゝも別を惜む風情なる所本をなをしや
母の胸を押揉ながら母に跡をうけさして立別る心裡風情なる今か

ちゝぶ国なる者を立させて此女子を娶せ給ふ
らん去ぬるぬしの国の人の者の子をもつて
男の子八十五人の内良人の子八人の一時嬰孩の命を
絹敷の上に置き給ふ絹後に赤子の時を脱しを要件の上にあるを見て殺ハ他
へきりて此の人の子を色に他母後の名を呼び偽て良人を
流て言人今て男の子松を流ちゝの只人を殺せんとハ牛ひ
こ男ひり八男の上を白張よ初信ぶ者狂ひる四男の子を低
塚よりゝが上を初て男子を殺きゆ子ゝ仏ゝ
ぶ子初子人法代百子法の新の名ゝ新
キノ三全傳終河奈ゝ三年